

ワーズワースの「辺境の徒」"Borderers"について (上)

前川, 俊一

<https://doi.org/10.15017/2332955>

出版情報 : 文藝研究. 40, pp.41-58, 1950-11-10. 九州文学会
バージョン :
権利関係 :



ワーズワースの「邊境の徒」“Borderers”について（上）⁹

前 川 俊 一

「辺境の徒」はウィリアム・ワーズワースが、その八十年に亙る長い生涯中に執筆した唯一の戯曲である。彼が、友人レイズレー・カルヴァートの遺贈の金を得て、向後永久に衣食の資の煩ひから解放され、不安と動搖に充ちた生活を清算して、妹ドロシーと共にドーセトシアのレイスダウンに落着き、平穩な生活のスタートを切つたのは、一七九五の九月であつた。詩人自身がフェニック・ノートで、「それはドーセトのレイスダウンで、一七九五の後半とその翌年に執筆された。」と語つてゐるところから察すると、この劇は新しい環境に身を置くと殆んど同時に執筆にかかつたものらしい。ワーズワースの詩人としての生涯に非常に重要な意味を持つやうになつたサミュエル・テイラー・コウルリッチとの交友も、丁度この時分から始まつてゐるのである。さて、コウルリッチは翌々年の六月に、ワーズワース兄妹をこの居に訪れてゐるが、その際、ワーズワースの口づから、この戯曲を読みかされた。このときのコウルリッチの感激ぶりは、彼が友人のコトルに宛てた次の手紙の一節にうかがふことが出来る。「私は眞実ここからさう思ひますし、またこの判断に狂ひはない（と私は思ひます）のですが、彼の傍へ行くと、自分がつまらぬ人間のやうな気がしてくるのです。しかも、それでゐて、以前に自分自身を評價してゐたよりも、自分を低く見積つ

てゐるわけではないのですよ。彼の戯曲はまつたく素晴らしい。貴方も平生私がこんな率直な、一途なものの言ひやうをしないことは御存知でせう。ですから尙更わけなく私の言葉を信じて下さると思ひます。あの作品には、人間の心の奥底をついたところがあります。それはシラーの「群盜」の中では三、四度、シェイクスピアの中ではよく見かけるしろものですが、それがワーズワースの場合は、まつたくむらといふものがないのですからね。」コウルリッヂも丁度この時分に、悲劇「オウソリオウ」を執筆中だつたのである。ワーズワースの書いた悲劇は、やがてコウルリッヂをめぐる人々の間に非常な評判を勝ち得た。この噂を、コウルリッヂの友人の一人を通じて聞き知つた當時の俳優ナイトは、ワーズワースにすすめて、それを上演に適するやうに切りちぎめさせ、コヴェント・ガードウンの支配人のハリスのところへ送らせてゐる。ワーズワースは、執筆当初は、これを自分でも高く評価してゐたが、元々上演を希望して、それを目当てに書いたわけではなし、それが上演台本として受入れられることは殆んど予期してゐなかつた。そしてそれは、予想通り、結局上演を断られて、彼の手に戻つて来たのである。しかし、この前後から、ワーズワースの心境も非常に變つて来たので、次第にこれを發表したがらなくなり、以前にしてゐたやうに、草稿を友人の間に廻覧させることさへ好まぬやうになつた。チャールズ・ラムなどもこの劇をしきりと一読したがつた一人であるが、希望は遂にかなへられなかつたらしい。かくてこの戯曲は、殆んど半世紀に亘つて、ワーズワースの篋底に眠ることになつた。しかし、一八四二年になつて、ワーズワースは結局この草稿を破棄するにしのびず、「運命を決定する役目を自分の子孫にゆだねるよりは、自分の生前に發表する責任を取る」と決心をして、慎重に訂正を加へた上、「Poems Chiefly of Early and Later Years.」の中に收めて出版した。もつとも、執筆時同様、出版時も上演を

予想してゐなかつたので、戯曲の筋や登場人物の性格にはいささかの変更も加へてゐないといふ。発表当時は、詩人ワーズワースの名声はすでにゆるぎのないものになつてゐた。当時の評壇は、この老大家にふさはしい敬意をもつてこの作を遇したといはれる。しかし、それは格別の興味も引起さなかつたらしい。以後エミール・ルグイの名著「ワーズワースの青年時代」で、この戯曲をとり上げるまで、一般読者の間でも、批評家の間でも、殆んど無視されて来た。只、スウィンバーンが、シェレーの「クウィーン・マブ」の弁護を試みるに際して、行動と激情をあつかふに適しないワーズワースの才能の限界を示す作品として、この戯曲を槍玉にあげ、それが「その中心思想の道德的把握と発展の点で、人間知性の眞摯な産物中におよそ類を見ないやうな、まるであり得ない出来事をあつかつた言語道断の病的且奇怪なる作品」⁽²⁾であると説いてゐる位のものである。

若きワーズワースは、ケムブリッジ卒業後、語学修得のため、フランスに再遊中に、フランス革命を支持する熱烈な共和論者となり、帰国後やがて大きな衝撃をうけて動搖と懷疑におそはれ、遂にその信條を放棄し、最後に古い信條の廢墟の上に新しい信條を築き上げるやうになつたのであるが、その経過の大意が、「序曲」の中で説かれてゐることは、誰も知る通りである。しかしながら、一七九三年二月の英仏間の宣戰布告が、彼のフランス革命熱に大きな衝撃を与へて以来の、彼の心境の推移のあとを語るくんだりには、不思議に敘述が前後し、入組んでゐて、脈絡がたどりがたく、また抽象的な説明が多くて、明瞭さを缺いてゐる。また「序曲」以外に、この期間に於ける彼の動靜をうかがふに足る資料は、これまた不思議に貧弱であつて、ことに一七九三年二月——七月、同年九月——一七九四年二月、及び一七九五年一月——九月に亙るワーズワースの足跡は、今日のところ殆んど全く失はれてゐる。この期間に關係

した「序曲」の中の敘述を読むとき、ワーズワースが、当時の己れの心境や行動につき、率直な言明を避けて、重要な事実をばかして語つてゐるのではないかと疑はれる節が多い。これには一体どういふ事情がひそんでゐるのであらうか。

ワーズワースのフランス再遊中に、プロワ生れの外科医の娘で、詩人よりは四才年上のマリィ・アン・ヴァロンと懇意になつて、女兒を生ませた経緯は、漸く今世紀の十年代になつて、デー・エム・ハーバーやエミール・ルグイの努力によつて明らかにされ、ワーズワースの伝記に一新生面を開いたかの感がある。しかしながら、この恋愛事件が、ワーズワースの詩人としての行路に投じた影響の大きさ、深さについては、いまだに評家の間に意見の一致を見てゐない。ウィリアム・ギャロドは、ハーバーによつて、詩人の若き日のこの秘められたロマンスが發表されたあと、この知識にてらして、再度「序曲」をよみ返したあと、ワーズワースは「自分の生涯の線を（ハーバーが引いたよりも）真に近い太さで引いてゐる」と断定を下してゐる。といふのは、この恋愛事件はワーズワースの詩人としての成長に、本質的な意味で何等深い關係を持つものでなく、その意味で、このエピソードを「序曲」から省いたところで、敘述の全般的眞実性は何等傷つけられてゐない、といふのであらう。しかしこれは、にはかには同意しがたい結論のやうに思はれる。エミール・ルグイは、この事件の傷手のために、ワーズワースはその詩の中で、劇的なもの、息づまるやうな激情の場面を扱ふことを避けるやうになり、そのためワーズワースの想像的把握が限られ、読者の数も限られるに至つた、と論じてゐる。⁽³⁾ ワーズワースが情熱的な恋愛を扱つた唯一の作品としては、かつて「序曲」中に挿入され、あとで省かれた、「ヴォードラクルとデュリア」がある。今日の我等の有する知識にてらして見るとき、この

中に描かれた熾烈な恋愛の情景が、ワーズワースの実際の経験から得られたものであることは一点疑ひを容れないと思はれるのであるが、しかもワーズワースは己れの秘密を読者に気付かれまいとして、笑止な程の心遣ひをしてゐるのである。即ち、この貴族の青年と、その幼馴染の身分低き女との間の悲劇的な情事について、ワーズワースは一八二〇年に、「出来事は事実である。それについては作り事は全然してゐない。またその必要もなかつた。」と記してゐる。そして晩年になつて、更にフェニック・ノートで、これは「あるフランス婦人がありのままに物語つたのであつて、件の婦人は言動の一切を目撃し、立聞きしたのである。云々。」とくだくだしい弁解を試みて、百年後にルグイから、「恋人の睦言を最も微細な節々まで立聞きし、兩人の最も秘密なあひびきに立合つて、しかも兩人に見られなかつたとは、山猫の眼と土龍の耳を持つた、さてさて驚くべきフランス女もあつたものかな。」とからかはれてゐる。もつともこれらは、ワーズワースの思想の硬化した晩年の述懐であるといへばそれまでであるが、彼の作品の全体を通観するとき、自己の不運な情事のいたましい思出が、恋愛に関する彼の詩想の自由な高翔を少からず阻害するとともに、情熱の表白について彼を必要以上に臆病にさせたことは、蔽ふを得ない事実のやうに思はれる。たまたま、上述の詩以外に恋愛詩を筆にしても、そこに伝説的な妖しい美を湛へながらも、己れの体験の表白としては何か実体性を缺いた、ミスティアイニングな感じの強い、かのルーシー詩群のやうな作品を生み出してゐるのも、原因の一半はこの辺にあるのではあるまいか。

しかしこのエピソードは、以上のやうな影響を彼の作品の上に投げかけてゐるにとどまらず、彼の独自の詩的体験や思想の形成に、もつと本質的な意味で、重要な交渉をもつて来てゐると推断されるのである。勿論、恋愛の経験が

当人に及ぼす影響は、その人の稟質によつてさまざまに異なるであらう。ある人にとつては、それは人生行路に於ける單なる偶然事、一挿話にすぎず、その不幸な思出も、脳裡に浅い創痕を残すにすぎないであらう。しかし、ワーツワースは、生れつき熱狂的であるに加へて、頗る敏感で、病的といつていい位に内省的な魂の持主であつた。彼は廿一才といふ、精神が柔軟で、外界から最も影響を受け易い時期に、あたかも革命の激動期にあつたフランスに渡り、かの地の將校ポビュイなどを通じて、熱烈な革命思想の洗礼を受け、政治的情熱をたぎらせたのであるが、丁度これと時を同じうして、異国の婦人との間に花咲いた恋愛は、若々しい彼の胸を当然大きくゆすぶつたことであらう。しかしこの事件が彼の心に大きな傷手を与えることになつたのは、恋愛そのものよりも、この恋愛の生んだ、恐らく当人同志も予期してゐなかつた結果と成行とであつた。アネットが身ごもつたのである。親身の相談相手のゐない異境の空で、これを知つたときのワーツワースの驚きと困却ぶりは想像に難くない。しかも彼は、身二つになつたばかりの母子を残して、「苛酷な必要にせまられて」英國に一先づ歸らねばならなかつた。歸る早々、英仏間の宣戰布告、兩人の結婚に対する後見者たちの不同意、資金調達の失敗と、この問題の解決をおくらせ、彼を歸趨に迷はせるやうな事件が次々に起つてゐる。彼は一七九三年秋に非常な危険を冒して渡仏してゐるらしいのであるが、これも恐らく、目的とするところは政治的なたちのものよりも、むしろアネットとの間の問題の処置にあつたのであらう。また、彼の伝記に於ける其他の空白期間も、やはりこれに關聯した事情で起つてゐるのであらう。結局彼は、周囲の事情のため、この恋愛問題を数年に互つて懸案のまま差措かねばならなくなつた。そしてこの間、この問題は感受性の並外れて鋭敏な彼の精神に対する良心の重圧となつて、不斷に彼を悩ましつづけるのである。The Affliction of Margaret:

The Thorn; Her Eyes are Wild; Ruth などは「罪と不幸」の中や「辺境の徒」の中の女乞食等々、夫に棄てられた母子や、戦争の惨禍に悩む女性の有様が、執拗と思へる程に繰返し彼の詩中にあらはれるのは、この間の消息をも雄弁に物語るものではあるまいか。

元来ワーズワースは、幼時から厳格なしつけを受けず、幼くして両親を失ひ、自由な雰囲気のうちに、山野を友として、幼年のその時々への衝動にまかせて、自然児として育つて来た。彼が個人の道義的責任といつた事柄について、眞剣な反省をさせられたのは、この恋愛事件をきっかけとしたつまづきに出逢つて以来のことではあるまいか。それは、ある意味では、英仏開戦による理想と現実との相刻の苦しみにもまさつて、直接に彼の内心をおびやかす問題であつたらう。この個人的な苦悩は、極度に内省的な彼の心中で、その後のフランス革命の意外の進展から来た幻滅感や自棄的な心理と複雑にからみ合つて、そこに一種異様な心境の変転を引き起こしたらしい。ところがワーズワースは、己れの魂の発展の忠実な記録であるべき「序曲」の中で、この恋愛事件と、それにともなふ内心の苦闘と、苦悩からの脱却の過程を、意識的に削除し、敘述を主として己れの政治思想の表面的な推移に限つてゐるために、その間の心境の推移について筋道の立つた説明が出来ず、先きに触れたやうな敘述の不明瞭化を来したと考へられるのである。ところが、「罪と不幸」や「辺境の徒」は、あたかも彼のこの「狂爛怒濤時代」の只中と直後に執筆されたものであつて、仔細に検討するとき、そこに彼の魂の内奥の消息に触れる節々が少くないことに気付くのである。この意味で、これらの作品は、彼の思想の発展の隠れたるリンクをさぐり、「序曲」の敘述を補ふ上に、相当重要な意義を持つものと考へられる。

以下、「辺境の徒」の内容についての考察をすすめるに先立つて、その劇の荒筋をたどつて見たい。

舞台は、十三世紀中葉のヘンリー三世治下の、蘇格蘭国境に近い北部英蘭地方に取られてゐる。この辺は英蘇両国の中央権力の影響の及びかねる地方で、法律が行はれず、秩序が確立されないままに、各人は各人の衝動と判断にまかせて行動する自由を与へられてゐる。

Happy are we,

Who live in these disputed tracts, that own

No law but what each man makes for himself;

Here justice has indeed a field of triumph.

(ll. 595—598)

この地方に、かつて十字軍に参加したことのある流賊 'freebooters' の一味が割拠し、青年マーマデュークを首領に押立てて、活潑な行動を営んでゐる。マーマデュークは一種の義賊であつて、その強い正義感に裏づけられた人情深いふるまひは、附近に平和と秩序をもたらし、部下の全体のみならず、住民をも悦服させ、「老人は彼等の足どりを祝福し、父なきものは避難所を求めて彼等の旗の下に来る」有様である。ところが部下の者たちは、新参のオズワルドといふ才氣走つた男が、うまく首領に取入つて信頼を勝ち得、何か彼をよからぬ方面に誘入れようとしてゐることに感づいて不安を覚えてゐる。オズワルドは若い時分に面白からぬ所業を働いたといふ噂があり、またマーマデュークはこの男の一命を救つたことがあるために、根性の曲つたこの男はかへつてこの事に負担を感じ、そのためマー

マデュークを憎んでゐる氣配が見えるのである。

gratitude's a heavy burden

To a proud soul.

(II. 30—31)

しかし鷹揚で、人を疑ふことを知らないマーマデュークは、オズワルドが諸事にあかるく、聰明であるのに惚れこんで、万事に彼の意見を徴し、部下の忠告には耳をかさない。オズワルドは變つた経歴の持主である。彼は青年の頃、十字軍に加はつて船でシリアに向ふが、その途中、隊長に悪意をいだく乗組員にはかられ、彼等の告口を信じて、隊長が自分に害意を抱いてゐると一途に思ひこみ、隊長をある孤島の荒磯に只一人置き去りにして餓死させる。しかし、後にそれがまつたくの無実とわかり、悔恨のあまり一旦は修道院に入る。しかしやがてそこを出て、新しい十字軍の流れに加はつてパレスティンに向ふ。途中シリアの沙漠を彷徨し、自然を相手にして冥想に沈み、己れの罪をかへり見、世間の有様について色々と思ひにふけるが、その結果、あらゆる人間感情を弱さのなせるわざと見て、自己の独立の知性の指し示す以外の一切の權威と因襲を否定する一種の高踏的な哲学に到達する。そして彼の知的傲慢心と、ある余る精力は、彼を駆つて自己の哲学を実践に移し得る冒險の世界へと彼を乗出さしめるのである。

オズワルドは何かの事情でマーマデュークのために命を助けられ、この年下の男の部下になるのであるが、彼はこの若き首領に、いまだ罪を知らざりし頃の若き日の己れの姿を見出して、愛着と嫉妬の入交る複雑な感情を経験する。そして、マーマデュークに、かつて己れの嘗めたと同じ經驗をなめさせ、現在の己れと同じ身の上に引入ようとする

誘惑に駆られ、その実行にとりかかる。

マーマデュークは、美しく純真な乙女、アイドウニアと相愛の間柄である。彼女はかつてこの附近の領主であつたハーバートの息女である。ハーバートは、かつて妻子をともなつて聖地に赴いたが、シリアの都市アンティオクに滞在中、敵軍におそはれ、妻子を惨殺され、当時赤ん坊であつたアイドウニアだけを、からうじて燃えさかる城内から救ひ出すが、そのときの火傷のため、彼は両眼を失明する。故国にかへつて見ると、自分の領地は他人に奪はれてゐる。それでいまはたよるところなく、老弱で盲目の身を、孝行な娘一人をたのみにして暮す哀れな境遇である。

さてオズワルドは、附近のある乞食女に金を与へて、マーマデュークに出逢はせ、自分も居合はすところで、アイドウニアは実はこの乞食女の娘であつて、赤ん坊の時にハーバートが自分の介抱役にとこの乞食女から買取つたものであること、またハーバートは外見は聖人のやうにしてゐるが、実は大の悪党であつて、自分の旧領恢復に尽力をして貰ふ交換條件として、好色淫蕩なクリッフォード卿にこの養ひ子を与へようとしてゐる、など眞赤な嘘をマーマデュークに告げさせる。この話をオズワルドも裏書するので、マーマデュークは人間の邪惡さの底知れなさにあきれ、人生に絶望する。

Marmaduke Oswald, the firm foundation of my life,

Is going from under me ; these strange discoveries——

Looked at from every point of fear or hope,

Duty or love——involve, I feel, my ruin.

(II. 547—550)

オズワルドは、かかる不屈きな男を罰するのは正義の命するところであると説き、ハーバートを処刑すべき機会をつくつては、しきりとマーマーデュークをそそのかす。マーマーデュークもオズワルドの説く理に服して幾度となくハーバートを殺しにかかるが、豪胆な彼がこの弱々しい盲目の老人の前に立つと、どういふものか心隠して手が下せない。

Marmaduke Thrice did I spring to grasp his withered throat,

When such a sudden weakness fell upon me,

I could have dropped asleep upon his breast,

(II. 890—892)

オズワルドは子女の情にほだされて正義の実行を怠るは男児の恥づるところであるとマーマーデュークにせまることが、その効ない。

Oswald The wiles of women,

And craft of age, seducing reason, first

Made weakness a protection, and obscured

The moral shapes of things.

(II. 1080—1083)

ワッツワースの「辺境の徒」"Borderers" についで (十)

遂にマーマデュークは、この老人の処置を天にまかせることに決心し、この盲目の老人を只一人、荒野に放置する。目的を達したと信じたオズワルドは、先づマーマデュークの取つた処置を称讃し、それを自分の哲学に引きつけて解釈しはじめる。

Oswald You have obeyed the only law that sense

Submits to recognize: the immediate law,

From the clear light of circumstances, flashed

Upon an independent Intellect,

(ll. 1493—1496)

そして徐々に話を罪惡と悔恨の話題に向はて行き、やがて例の隊長をあやまつて餓死させた自分の過去の罪のこと、その思出に悩みぬいたこと、しかしその悩みのおかげで幸ひと自分は社会のあらゆる因襲や道徳を超越して、己れの理知のみにたよつて行動する自由を得たことを語り、いまや二人は同じ境遇によつて結ばれたのであるから、ともに手をたづさへて新天地を開拓しようと呼びかける。

Oswald. Ay, we are coupled by a chain of adamant;

Let us be fellow-labourers, then, to enlarge

Man's intellectual empire. We subsist

In slavery; all is slavery; we receive

Laws, but we ask not whence those laws have come;

We need an inward sting to goad us on.

(Il. 1854—1859)

はじめオズワルドの話に同情して耳傾けてゐたマーマデュークは、話のすすむにつれて、自分がオズワルドのたくらみにかかつて、無辜の人間に危害を加へたことが次第にわかつて行く。最後にオズワルドは、かかる行動を取るに至つた自己の奇怪な心中の秘密を打明けて

I was urged,

(For other impulse let it pass) was driven,

To seek for sympathy, because I saw

In you a mirror of my youthful self;

(Il. 1862—1865)

と語り、ハーバートは何の罪もない人間だと断言する。マーマデュークは色を失ひ、ハーバートの生存を祈りつつ、すぐと搜索に立去る。しかしその途中で、ハーバートはすでに死んだと聞いて氣を失つて倒れる。やがて正氣にかへつた彼は、自己のはやまつた行動の一切をアイドウニアに告白する。そこへ、自分の告白が引起した意外な結果に驚愕した乞食女があらはれて、オズワルドの言ひつけで嘘を述べたてた顛末を告白する。マーマデュークの部下の一味は憤激して、オズワルドをとらへるが、オズワルドは、悔ひを知らず、昂然としてかく答へる。

If I pass beneath a rock

And shout, and with the echo of my voice,

Bring down a heap of rubbish, and it crush me,

I die without dishonour

(ll. 2314—2317)

そして部下の一人の手双にかかつて斃れる。マーマデュークはアイドウニアの世話を部下の一人に托し、懺悔の行のため、あてどのない旅にのぼる。これで劇の筋は終つてゐる。

この悲劇を一個の作品として見るとき、比較の対象として先づ聯想されるものは、シェイクスピアの「オセロウ」であらう。高潔で單純な氣立の武人が、信頼し切つてゐる一部下の惡魔的な意圖のとりことなつて、無辜の人を殺し、あとでそれとわかつて、痛恨のあまり身を破滅させるところは両者軌を一にしてゐる。また「オセロウ」の中のイアーゴウ、「辺境の徒」の中のオズワルドが、己れの意圖の遂行のために女性を利用し、また知らずしてかかる悪人の手先に躍つた件の女性が、あとでその引起した結果の恐ろしさに驚愕して訴へ出で、そのため奸計が暴露して、悪者がほろぶ趣向も似かよつてゐる。しかしこの兩悲劇が最も似かよつてゐる点は、あとで詳論するが、イアーゴウ、オズワルドが、ともに常人には一寸理解し難い、所謂「無動機」の犯罪と思はれるものを犯してゐる点にあらう。ワーズワースはこの劇の執筆時にその序文を書いてゐるが、その中にイアーゴウへの言及があるところなどから見ても、これは單なる偶然の一致とは考へられない。

しかしこれを芸術作品として見る場合、その出来榮えに何と大きな差のあることであらう。イアーゴウが非凡の知

力と意志力を行使して、術策をめぐらせ、不測の偶發事に巧みに便乗して、一本氣のオセロウの胸中に喰ひ入り、錯覺と嫉妬心を煽り立ててゆく手際のあざやかさには驚嘆の外ない。それに比べると、オズワルドの用ひる術策は甚だ御粗末である。先づ、彼がでつち上げたところのハーバートとアイドウニアとの身分關係やハーバートの意図をマーマデュークに信じさせる手段があまりに簡單である。それに、その虚構の事實の内容が、マーマデュークをしてあのやうに性急で思ひ切つた行動を企てしめるに充分の理由とはどうしても考へ得られない。虚心にこれを読むとき、かかる幼稚な術策にかかつてオズワルドの意のままに動くマーマデュークは、愚者か、それともオズワルドの催眠術にかかつた男かと怪しみたくなる。到底一党の首領として立てられる人物とは思へない。尙この点に關係したことがあるが、「オセロウ」にあつては、オセロウに訴へる動機が、單なる正義感ではなくて、人を盲目にする嫉妬心であることに、シェイクスピアの周到なる用意を見るのである。しかしながら、「辺境の徒」中で最も問題となるのはオズワルドの奇怪な心理である。先きにも触れたやうに、ワッツワースがこの劇を執筆するに當つて、「オセロウ」の影響を受けてゐることは容易に推測し得られるところであつて、オズワルドの性格の背後には多分にイアーゴウの影がちらつて見える。ちなみにマーマデュークの部下の一人ウォレスがオズワルドを評する言葉

Natures such as his

Spin motives out of their own bowels,

(II. 1427—1428)

は、後年コウルリッヂがイアーゴウを評した有名な言葉「無動機の惡の動機漁り」 the motive-hunting of a motiveless malignity を予想させるものがあり、後に引くワッツワースの「惡の動機」についての言葉と考へあはす

ワッツワースの「辺境の徒」“Borderers”について（上）

とき、「オセロウ」の解釈をめぐる両詩人の意見の交流関係の存在を推測させる。さて、オズワルドもイアーゴウと同様に自己の智力に絶大の自信をいだく倨傲な男であつて、世間的な道德觀念や義理人情を蔑視し、自分で築き上げた自分勝手な哲学を固執する。そしてうちにみなぎる精力に駆られてその哲学の実践に乘出し、常人には了解のつかぬやうな兇惡な陰謀をたくらんで善人を破滅させる。しかも事あらはれても恬として恥ぢず、平然として人に殺されるのである。只、シェイクスピアとワーズワースの行き方の異なるところは「オセロウ」にあつては、心理解剖の中心は惡人のたくらみにのせられるオセロウ自身にある。そこには、いままで貞淑で純眞と思ひこんでゐたデスデモナを、イアーゴウの巧妙な術策と弁舌にあやつられて、不貞の妻と次第に信じさせられて行く途上に、オセロウの心中にたける幻滅と愛憎の嵐が心にくいほどの迫力で描かれてゐる。これに対して、イアーゴウがたくみに人心を洞察してそれをあやつる非凡の技巧は、その言動を通じて生々と描かれてはゐるが、イアーゴウその人の性格は、オセロウの心理や行動の展開を引起す原動力として必要な限りに於て触れられてゐるにすぎない。そこにイアーゴウの性格について古来いろんな論議をまき起した原因がある。ところが「辺境の徒」にあつては、心理解剖の中心は、マーマデュークを陥れるオズワルド自体にある。この事は、先年アーネスト・ド・セリンコートによつて發見されたところの、ワーズワース自身の執筆したこの劇の序文を讀んで⁽⁴⁾もわかることであらう。この序文は、劇そのものの筋の解説といふよりも、寧ろ劇中の人物オズワルドの複雑な心理の分析に殆んどその全力をささげてゐるのである。そしてこの序文は、ワーズワース自身の説明によれば、「惡人の外見上は無動機に見える行動を、注意深い觀察者には成程と納得させるところの人間性の氣質傾向を例証するもの」として書かれたものである。これによつて、ワーズワ

ースは、シェイクスピアも手を染めてゐない、微妙な手際を要する仕事に、意識してぶつかつて行つてゐることがわかるのである。しかしながら、ワッツワースはこの難事を克服して、オズワルドを生きた人間として描き出すことに成功してゐない。それは先づ、オズワルドにとらせた行動の中核的な点で誤りを犯してゐる。オズワルドが單に己れの若き日を偲ばせる青年に嫉妬を覚え、現在の己れと同じ境遇に陥れようとして策略をめぐらすといふだけであれば、それは人間心理の暗黒面をついたものとして、成立たぬ訳はあるまい。しかし彼が己れの目的が達成されたと見てとるや否や、己れの胸中の秘密を平然と打明け、それを機縁として、自分に陥れられた相手が、自分のでつち上げた自分勝手な哲学をあつさり受入れて、己れと行動をとにもするものと極めこんでゐるに至つては、非常識を通り越して、狂信者か一種の性格異常者と見なす外ないやうに思はれる。シェイクスピアの創造したイアーゴウは、非人間的な一面を具へた惡の權化のやうな男であるが、それはそれながらに行動原理の統一を保つてゐる生きた人間である。ワッツワースがオズワルドに賦与した人間味の一面は、かへつてその心理的統一を破り、この男をして精神分裂症的存在たらしめてゐる。先きにも述べたやうに、セリンコートの發見にかかるワッツワースの序文は、殆んどあげてオズワルドの心理の解剖に終始してゐるのであるが、これは一面からいへば、作者自身も劇中のオズワルド像の不完全さを認めてゐたことを物語るものであらう。

しかし、問題は、ワッツワースの書いたこの序文自体にもある。それは一見、劇の不備を補ふために執筆されたもののやうである。しかし、不思議にも、ここに展開されたオズワルドの心理の精細な解剖を読んだところで、そのために劇中のオズワルド像は、一向により具体的な存在として、我等の眼前に立ちあらはれないのである。それは先づ、先きに指摘した心理の矛盾を解決してゐない。のみならず、序文では劇中のオズワルドに直接必要でない、余計な要

素まで持込んで、オズワルド像の明確さをかへつて妨げてゐる。序文中で解剖されてゐるオズワルドと、劇中のオズワルドとの間には明らかに一種のずれがある。そして序文に添へたセリンコート（註）の解説も、この間のずれには一向に觸れてゐないやうである。我等が序文を読んだ感じからいへば、ワーズワースは劇中の性格の創造とか、具体性とかいつた問題よりは、もつと己れの生き方に、ぢかに觸れた、いはば芸術以前の問題と懸命に取組んでゐるやうに思はれる。そして劇中のオズワルド、更には「辺境の徒」全体は、さういふ彼の中心的な関心事が、ある不自由な制約の下に、不完全な芸術的形象化をうけて現はれたものにすぎないといつた感じがするのである。かくして問題は、この劇を執筆してゐた当時の彼の心境のそれに移つて行く。

では、当時ワーズワースの中心的な関心事となつてゐたものは一体何であらうか。それは、今まで検討し來つた劇の内容や、序文からしてほぼ明らかやうに、思弁的傾向と結びついた人間惡の問題であるといへよう。しかもそれは、一種異常な環境に立たせられて、心理的に平衡状態を失つてゐる人間の犯す罪惡の問題なのである。では、ワーズワースは、どういふ事情で、かういふ問題に深い関心を持つやうになつたのであらうか。ここで我等は、この劇の執筆當時にいたるまでの彼の思想的推移のあとを一応ふりかへつて見なければならぬ。

註 (1) 本稿は筆者に交付された昭和廿四年度文部省科学研究費による成果の一部である。

(2) A. Swinburne: *Miscellanies*, "Wordsworth and Byron."

(3) E. Legouis: *Wordsworth and Annette Vallon* p. 118.

(4) *The Nineteenth Century and After*, No. DXCVII, Nov. 1926, "The Hitherto Unpublished Preface to Wordsworth's 'Borderers'".